

若宮田遺跡発掘調査報告書

1979

**南宮崎農業協同組合
清武町教育委員会**

若宮田遺跡発掘調査報告書

1979

**南宮崎農業協同組合
清武町教育委員会**

序

町教育委員会におきましては町内に存在する埋蔵文化財を記録保存するため開発工事等行なわれる場合には、文化財保護法第57条の2の規定により開発行為者において発掘調査を行なうことになっております。

今回は南宮崎農業協同組合が計画している営農施設予定地内に埋蔵文化財包蔵地（若宮田遺跡）があり、これを記録保存するため工事主体者である南宮崎農協から町が委託を受け調査したものであります。

本書は、本町の歴史をひもどく資料として広く活用していただきとともに、年々失なわれている文化財について充分認識していただき、文化財保護に今後一層の御理解と御協力を願うものであります。

尚、この調査にあたり県文化課及び調査員には種々御配意いただき深甚の謝意を表するとともに主旨御理解御協力頂いた南宮崎農協に敬意を表します。

昭和55年3月3日

清武町教育委員会

教育長 黒木盛幸

例　　言

1. 本報告書は、清武町教育委員会が南宮崎農業協同組合から委託を受けて実施した。総合営農センター建設事業に伴う若宮田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、昭和54年6月20日～6月30日まで実施した。
3. 本稿の執筆及び遺物実測、トレース、図版作成には岩永哲夫があたった。
4. 本書の編集は岩永哲夫が行ない、監修は日高正晴が行なった。
5. 本書に使用した土層の色調は、新版標準土色帖によった。

本文目次

I 調査に至る経緯及び調査経過	1
II 遺跡の位置と環境	8
III 遺 跡	8
1. 層 位	8
2. 遺 物	8
IV まとめにかえて	22

挿図目次

第 1 図 遺跡付近図	2
第 2 図 発掘調査区域図	4
第 3 図 北壁七脚図	4
第 4 図 西壁土層図	5
第 5 図 駒文土器出土状況	6
第 6 図 石器出土状況	6
第 7 図 上師器出土状況	7
第 8 図 土鍋及び現出土状況	7
第 9 図 駒文土器、石鍋、石器出土状況	8
第 10 図 土師器、剝山土状況	8
第 11 図 第 1 類土器	9
第 12 図 第 2 類土器	11
第 13 図 第 3 類土器	12
第 14 図 第 4 類土器	12
第 15 図 第 5 類土器	13
第 16 図 第 6 類土器	13
第 17 図 第 7・13・14 類土器	15
第 18 図 第 8 類土器	16
第 19 図 第 9~12 類土器	16
第 20 図 駒文土器	18
第 21 図 駒文土器	19
第 22 図 駒文土器底部	20
第 23 図 石器実測図(石鍋)	20
第 24 図 石器実測図	21

図 版 目 次

図版 1	遺跡付近航空写真	23
図版 2	(1) 遺跡遠景 (2) 宮崎医科大を望む	24
図版 3	(1) 青島を望む (2) 発掘風景	25
図版 4.	(1) 発掘風景 (2) 集石状況	26
図版 5.	縄文土器出土状況	27
図版 6.	土師器出土状況	28
図版 7.	土師器出土状況	29
図版 8.	(1) 土師器出土状況 (2) 上鏡出土状況	30
図版 9.	(1) 剣出土状況 (2) 砥出土状況	31
図版 10.	石器出土状況	32
図版 11.	石器出土状況	33
図版 12.	出土土器	34
図版 13.	出土土器	35
図版 14.	出土土器	36
図版 15.	出土土器	37
図版 16.	出土土器及び石器	38
図版 17.	出土石器	39
図版 18.	出土土器	40

I. 調査に至る経緯及び調査経過

調査に至る経緯

南宮崎農業協同組合の総合営農センター建設計画については、昭和53年8月に国土利用計画法による大規模土地取引事前指導申出案件として、県教育庁文化課に照会があった。同地区一帯の丘陵は清武城跡を中心として、連続と続く各時代の豊富な歴史的背景をもち、遺跡の集中した一帯であることから、同計画地内についても遺跡の可能性が考えられたので、8月19日文化課主任主事小森達郎、同岩永哲夫が現地調査を行なった。その結果、縄文土器片、土師器片、黒曜石片等の散布を確認し、遺跡の存在が予測された。

計画地の地目は、山林・原野・田・畠等であるが、遺跡の予測された地点は全体計画地の南端、最も高い地点にある畠地であった。

この現地調査の結果をもとに、南宮崎農業協同組合、清武町教育委員会、県文化課の間で、遺跡の取扱いについて協議を重ねた結果、工事着工前に発掘調査を実施して、記録保存の措置をとることとなつた。また、発掘調査は、清武町教育委員会を調査主体者として、南宮崎農業協同組合の委託を受けて行なうこととした。

調査経過

調査は、昭和54年6月20日から6月30日までの10日間、調査員日高正晴、岩永哲夫で行なつた。時期的に丁度梅雨期にあたり、決して恵まれた状況ではなく、前半は真夏を思わせる暑い日が続き、中盤から雨間をついての調査となつたが、地元作業員の方々の協力で無事終了することができた。

調査は、計画地の中で最も高い井田房吉氏所有の畠地に8×8mを小単位にする9×27mのグリッドを組み、1, 2, 8, A, B, C区……とした。表探の結果、小片ではあったが、縄文土器片、土師器片、黒曜石片を少量発見していたので、縄文時代から清武城築城の時代中世に至るまで営まれた遺跡ではないかと考えた。まず、2, 8のA～D区72m²について調査をはじめ、後半に2-G, H区18m²を実施した。

調査の組織

委託 南宮崎農業協同組合 組合長理事 長友 安盛

副組合長理事 小倉 久俊

参事 谷村 麟

調査主体者 清武町教育委員会

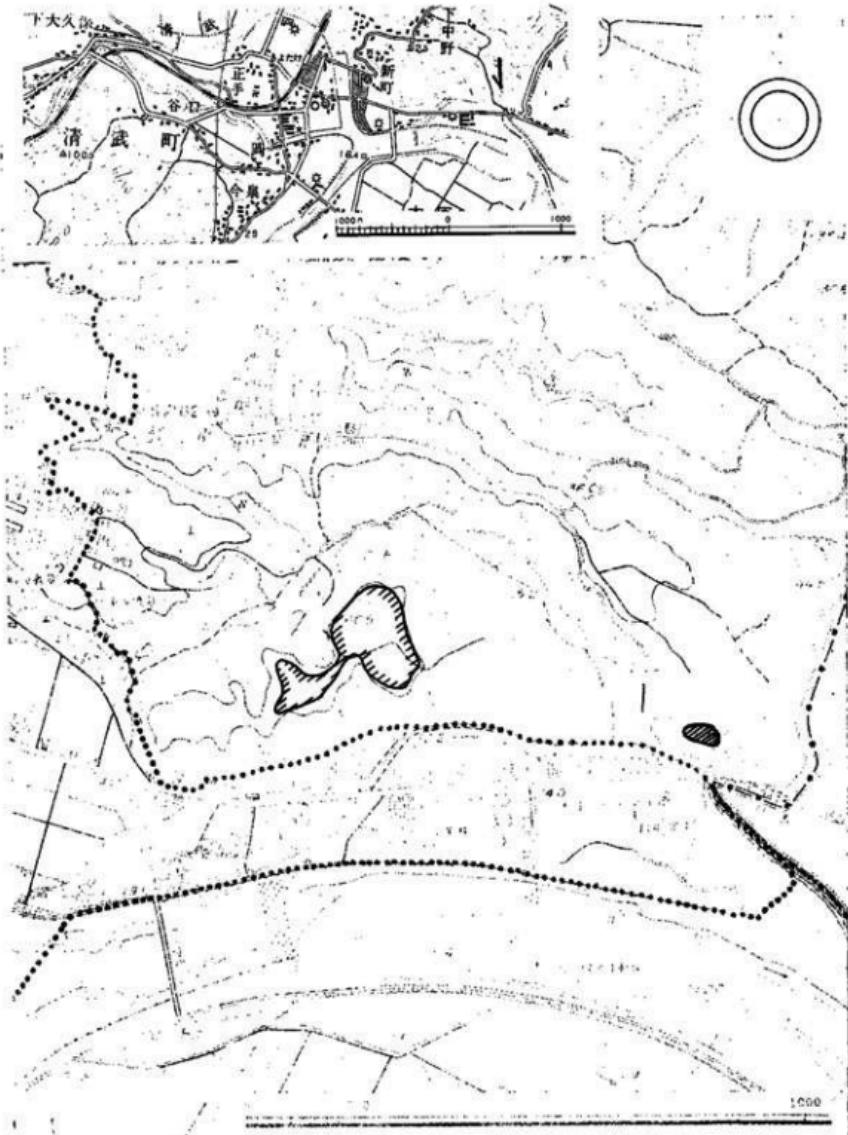
調査責任者 清武町教育委員会 教育長 黒木 盛幸

事務局 同 社会教育課 社会教育課長 岩切 哲

調査員 日高正晴（県文化財保護審議会委員）

岩永哲夫（県教育庁文化課主任主事）

調査補助員 横方博文（西都市在住）



第1図 遺跡付近図 (1若宮田遺跡 2辻遺跡)

II. 遺跡の位置と環境（第1図）

遺跡は、清武町役場から東へ1.7km、清武町市街地から宮崎市郡司分へ向かう道路の北側丘陵地つまり宮崎市との境界に近い大字木原若宮田に所在する。

遺跡は標高約60mの高所にあり、西から東へ延びた小丘陵の突端にある。東には日向灘、青島、南には双石山そして宮崎医科大学の白い建物が聳ち並び、西には鶴塚山、北には宮崎市街地、眼下には清武川が広がる極めて眺望の良い場所である。南側は急峻で、県道は直下に見えるほどである。

清武町内の最近の考古学的調査に、九州縦貫道関係遺跡として県教育が発掘調査をした昭和51年の城内遺跡（清武城跡）、昭和52年の小原遺跡の2ヶ所がある。この2遺跡からいずれも少數ではあるが、繩文土器を出土しているので、周辺をも含め、若宮田遺跡と比較検討することも必要となろう。また、この調査後、昭和54年12月に清武町教委による辻遺跡の発掘調査が行われているので、その整理結果が楽しみである。辻遺跡の場所は、本遺跡のすぐ西側の小独立丘陵上にある。立地としては、面積の大小はあるにせよ、若宮田遺跡とほとんど同じである。

その他、清武町内には、4基の県指定古墳（大字加納字下岩見田8基、字白砂坂1基）をはじめ埋蔵文化財包蔵地として、下星野遺跡、木原遺跡、正手遺跡、竹ノ山遺跡、瀬ノ上遺跡、上中野遺跡、下ノ原遺跡、杉木原遺跡などがあり、また清武城跡も有名で、遺跡の宝庫であるといえる。

III. 遺 跡

1. 層位（第3図）

調査区の土層を2-A, B, C, Dの北壁について概観すると。

I. 灰黄褐色土層・80~50cm（この層は耕土であり、耕作により畾り上げられた土器細片を含んでいる。）

II. にぶい黄褐色土層（2-A区西寄りにわずかにブロック状に残っている。）

III. 黒色土層・20cm（2-A区のみにみられる。）

IV. にぶい黄褐色土層（2-B区にV層中にブロック状に残っているが、8-A区西壁ではV層の上層として食い込む様にみられ、60~100cmの厚い層を成している。）

V. 褐色土層・10~50cm（この層は全体的にみられる。）

VI. 暗褐色土層・80~50cm

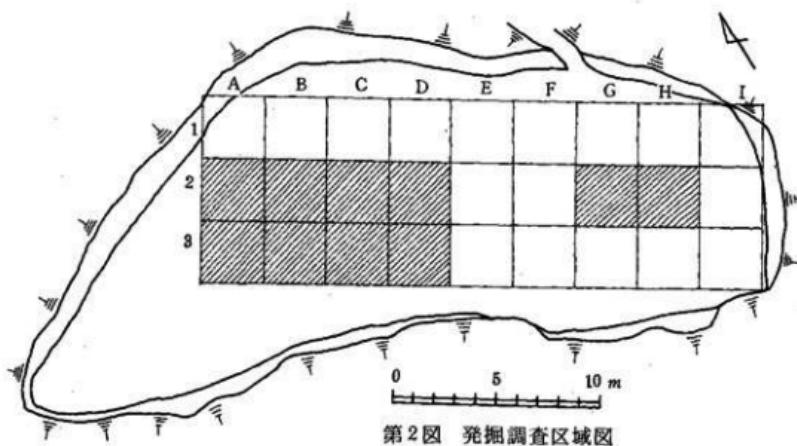
VII. 暗褐色土層・80~50cm

VIII. 硬質褐色土層

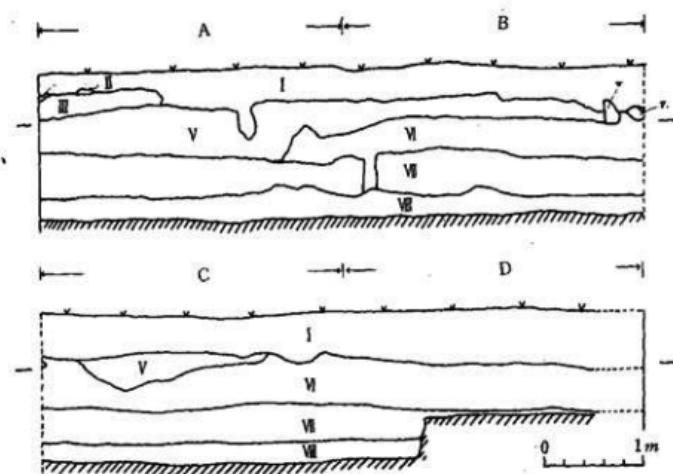
の順位が觀察される。しかし、平面的にはV-VI層を中心として上層は層の起伏が大きく、擾乱された層と言わざるえないほど層の把握が困難であった。遺物は主にV~VI層からの出土である。

2. 遺 物

遺物は、繩文土器、土師器、石鏃、石錘、石錐、石斧、石匙、硯、剣等である。

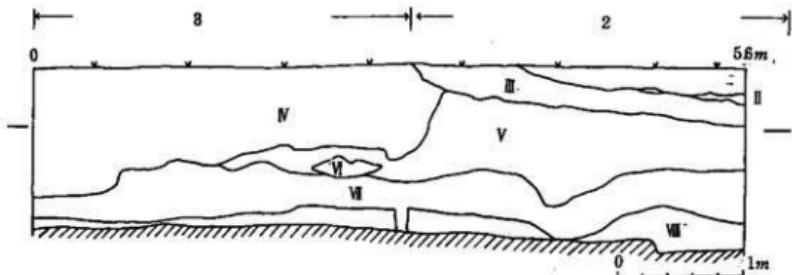


第2図 発掘調査区域図



第3図 北壁 土層図

- I. 灰黃褐色(10YR 5/2)土層
- II. にぶい黄褐色(10YR 5/4)土層
- III. 黒色(7.5YR 3/1)土層
- IV. にぶい黄褐色(白色混、10YR 5/6)土層
- V. 棕色(7.5YR 3/6)土層
- VI. 暗褐色(7.5YR 3/4)土層
- VII. 暗褐色(10YR 5/8)土層
- VIII. 硬質褐色(7.5YR 4/6)土層



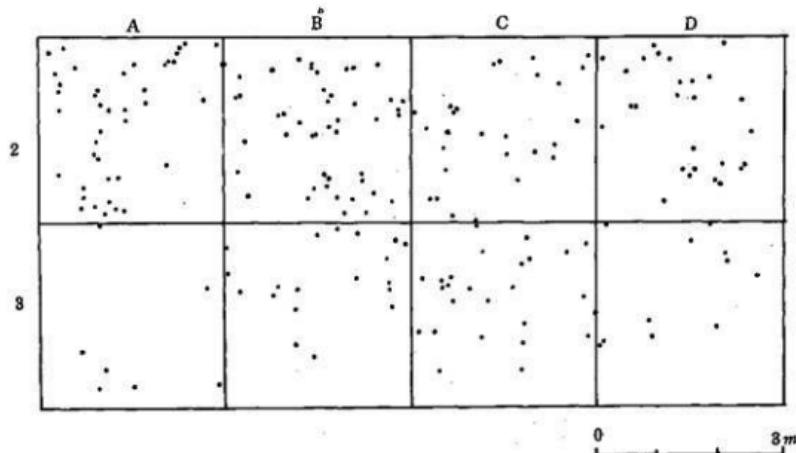
- I. 灰黄褐色(10 YR 4/2)土層
 II. にぶい黄褐色(黄色混, 10YR 5/4)土層
 III. 黒色(7.5YR 2/1)土層
 IV. 黑褐色(Hve 10YR 3/2)土層
 V. 褐色(7.5YR 4/6)土層
 VI. 黒褐色(10 YR 3/2, 7.5YR 4/6の混じり)土層
 VII. 暗褐色(10YR 3/6)土層
 VIII. 硬質褐色(7.5YR 3/6)土層

第4図 西壁土層図

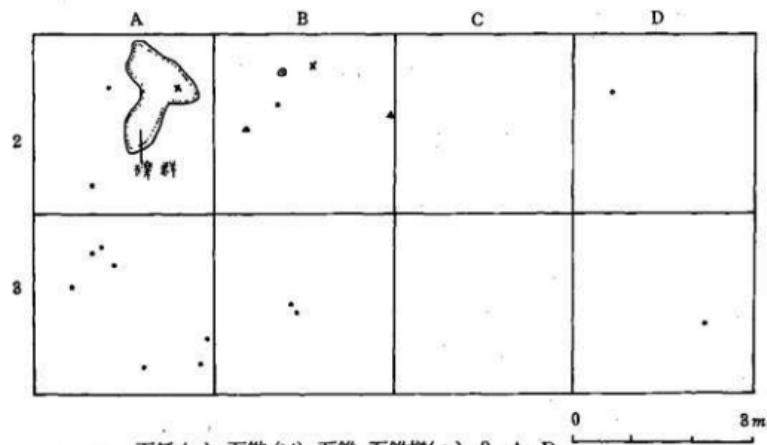
本報告では縄文式土器を中心にして述べ、土師器、石器、剣その他については、実測図、図版を掲載しておき、別の機会に詳しく報告したい。

縄文式土器は、文様的特徴により分類すると次の14類に分けられる。

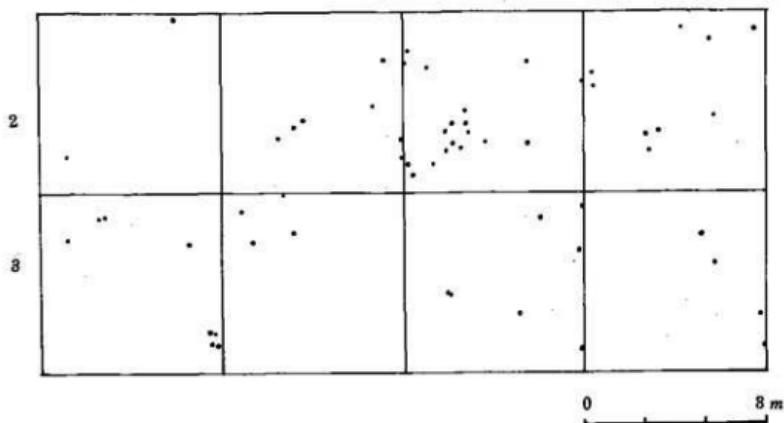
- 第1類 押型文土器(精円文, 山形文)
- 第2類 燃糸文土器(塞ノ神A-a式)
- 第3類 燃糸文土器(塞ノ神A-b式)
- 第4類 貝殻文と沈線の組み合わせ(塞ノ神B式)
- 第5類 貝殻文系土器
- 第6類 貼付刻目突帯文土器
- 第7類 ミミズバレ文土器(轟式)
- 第8類 クサビ形貼付文土器(吉田式)
- 第9類 条痕文土器
- 第10類 条痕文土器(口唇外面に刻目)
- 第11類 刺突押し引き文土器
- 第12類 貝殻文土器(綾杉状の貝殻押圧文)
- 第13類 市来式土器
- 第14類 無文土器



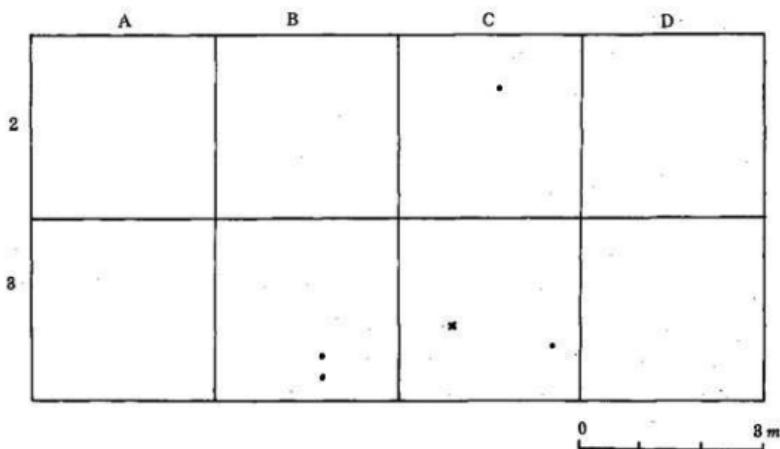
第5図 繩文土器出土状況
2-A~D
3-A~D



第6図 石錐(・),石鎌(X),石錐,石錐様(▲)
2-A~D
石斧(○),出土状況
3-A~D



第7図 土師器出土状況 2-A~D 区
8-A~D 区



第8図 土錐及び硯(×印)出土状況 2-A~D 区
8-A~D 区

第1類土器（押型文土器）（第11回）

(1)は、口縁部に近いものとみられ、外反している。外面に長径3mm、短径1mm程度の粒文を模倣に施文している。器厚は8~9mmで焼成悪く、褐色を呈している。

(2)は、外反した口縁部である。外面は無文で、内面に口唇部下屈折部までの約2cmの間に粗い粒文を施文している。風化がはげしく脆くなっているためはっきりしないが、口唇部にも施文しているようである。器厚は屈折部で12mmを測る。

(3)は、胴部破片で、外面に長径5~7mm、短径2~4mmの比較的大きめの横円文を施文している。焼成が良好であり、施文時の形状が菱形状によく残存している。褐色を呈し、器厚9mmである。

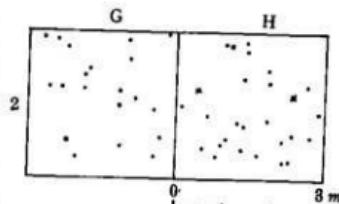
(4)は、胴部破片で、長径6~7mm、短径2~3mmの大きめの横円文を縱走させており、器面の磨滅がはげしい。焼成良好、内外面ともに黒褐色を呈し、器厚は11~14mmである。

(5)は、焼成良好の胴部破片であるが、施文面の磨滅がはげしい。計測可能な場所での文様の形状は、長径5~6mm、短径2mmの横円文である。器厚10mm程度の褐色土器である。

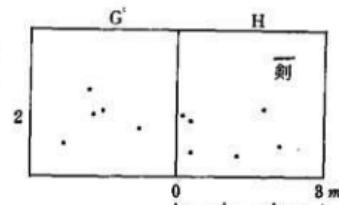
(6)は、外反する口縁部で、非常に脆く、風化の著しい褐色の土器である。内外面ともに施文がみられ、外面は山頂間8mm、山の高さ5mmの山形文を縱走させ、内面は口唇から20mmまでの間に山形文を横走させている。器厚は最大1.8mmである。器的には前述の(2)と同様とみられ、口縁部外反の深鉢形土器と考えられる。

(7)は、焼成良好な胴部破片であるが、丸みのある太目の山形文を外面に横走させている。大きさは山頂間8mm、山の高さ6mmを測り、下部には複合した文様がみられる。器厚8mmの褐色を呈した土器である。

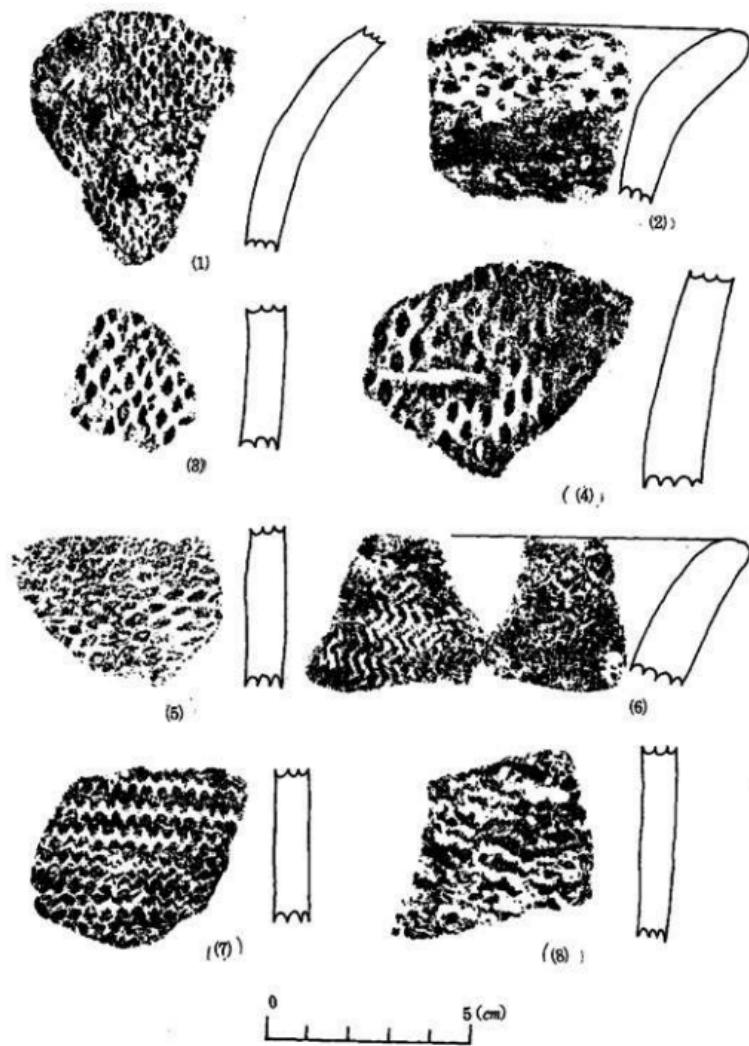
(8)も焼成良好な胴部破片である。外面に施文した山形文は表面が磨滅した様に見えるが、焼成前に押し潰されたのではないかと思われる。山形文の形状ははっきりしない。器厚7~8mmの褐色土器である。



第9図 縄文土器(・),石鏃(X),石匙(■)
出土状況(2-G, H区)



第10図 土師器、劍出土状況(2-G, H区)



第11図 第1類土器

第2類土器（第12図）

いわゆる塞ノ神A式土器と呼ばれる燃糸文土器で、(1)～(4)まですべて胴部破片である。

(1)は、焼成良好な褐色土器であるが、施文面は脆くなっている。上部には2条の沈線文を施し、その下には6mm程度の間隔をもって幅11mmの網目状燃糸文を上から下へ回転押捺している。器厚8～10mmである。

(2)は、焼成良好な褐色土器である。燃糸文を縦に施文し、その上から沈線文を5条横走させている。器厚は8mmである。

第2類には、縦位に施文した直線的な燃糸文(2),(8),¹⁰,¹¹,¹²,¹³と、網目状に表現された燃糸文(1),(3),(4),(5),(6),(7),(9),¹⁰,¹¹,¹²,¹³の2種類があるが、いずれも器形的には大差ないものであろう。

第3類土器（第13図）

燃糸文系のいわゆる塞ノ神A-b式である。

(1)は、焼成良好な褐色土器である。左端に幾何学的文様の沈線を描き、右側に縦位の燃糸文がみられる。器厚7～10mmを測る。

(2)は、焼成の良い黒褐色を呈した胴部破片である。(1)と同様の施文形態である。器厚8～9mmである。

(3)は、左側に浅い沈線を描き、その右側に縄文を左上から右下に斜行させている。器厚8mmの焼成の良い褐色土器である。

(5)は、焼成の良い褐色を呈した底部である。平底で上部はわずかな膨らみを持っている。文様は、無文帯と縄文帯を浅い沈線によって分けているが、無文帯にも若干縄文が入り込んでいる。器厚9mmを測る。

この類は、太い沈線+燃糸文(1),(2),浅い沈線+縄文(3),(4),(5)に分けられる。

第4類土器（第14図）

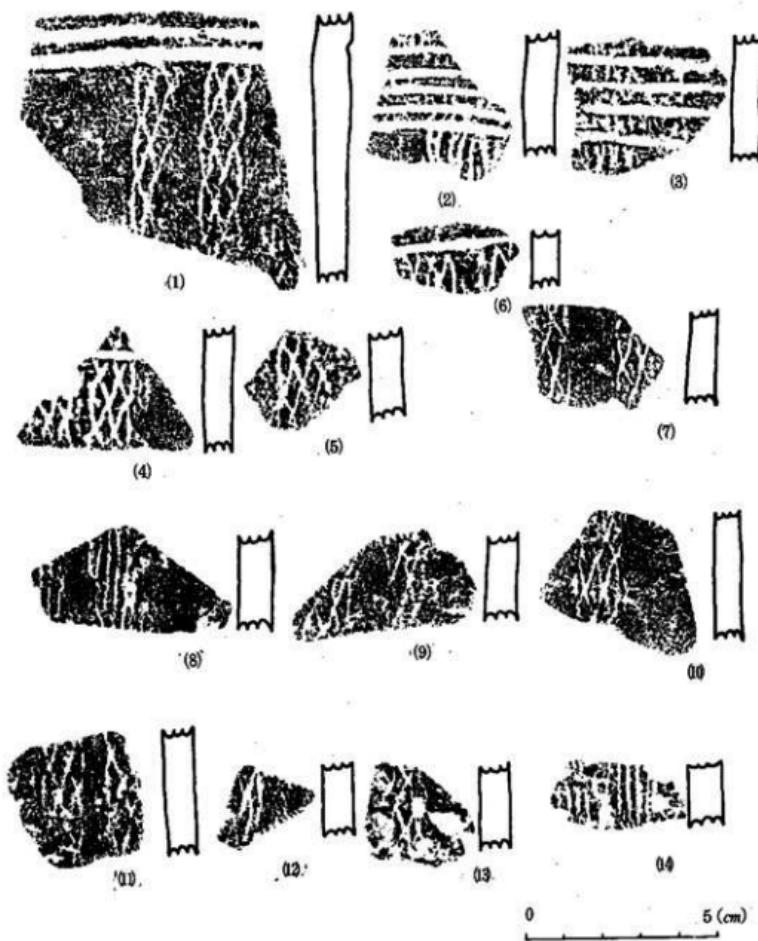
貝殻文と沈線文を組み合せたもので、塞ノ神B式土器と呼ばれるものである。

(1)は、口唇部であり、口唇直下に一列、その下1・2cmの間隔を置いて二列貝殻文を横位に押圧施文している。焼成良好な褐色土器で、器厚は最大12mmである。

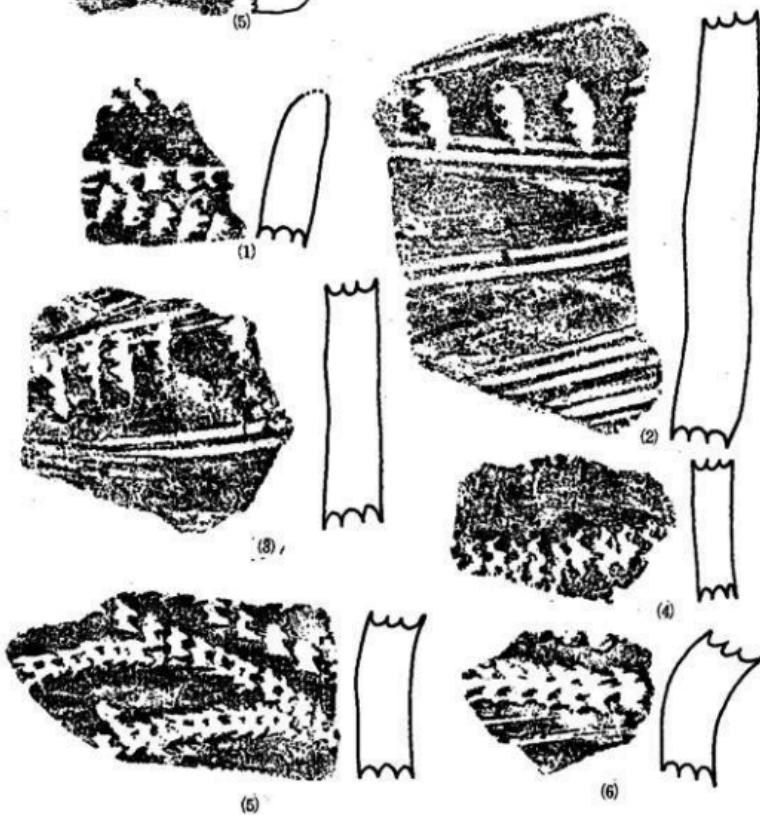
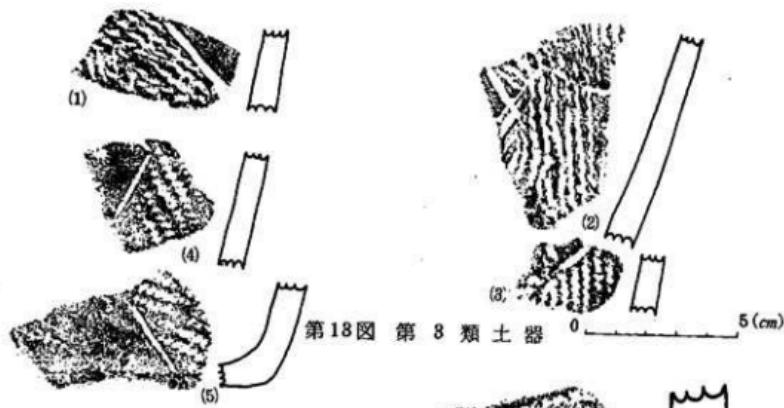
(2)は、焼成良好な褐色土器で胴部にあたると思われ、上部に貝殻文を横に一列施文している。貝殻の小単位間は約1cmである。また、貝殻文を施していない部分には2～8条を単位とする沈線文を横位、斜位に施文している。15mmの厚さをもつ厚手土器である。

(3)は、(2)と焼成・色調・文様構成とともに酷似しており、同一個体であろう。器厚は12～18mmである。

(5)は、頸部に近い部分と思われるが、幅5～6mmの小形貝殻施文帶により左から右へ押引き施文しており、幾何学的文様を構成している。沈線文は認められない。器厚は12mm、焼成良好、褐色を呈した土器である。



第12図 第2類土器

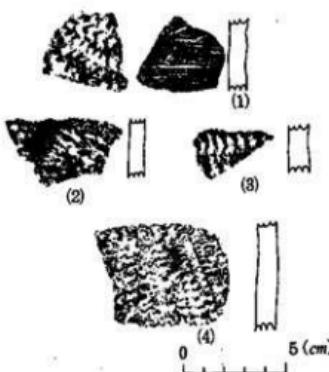


(6)は、頸部であり、屈折部に貝殻を押引き施文している。貝殻文の下には、鋭い平行した条痕を斜めに施している。器原は14mmの厚手土器である。

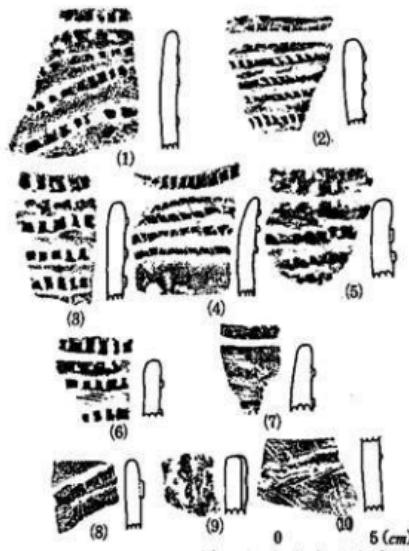
第5類土器（第15図）

問題の残る土器であるが、ここでは一応貝殻文系土器として扱っておく。当初回転押捺した山形文ではないかと考えていたが、部分的に貝殻押捺とみられる部分もあり、又内面が貝殻により調整された可能性もあり、速断しがたい。今後、検討していくべき資料である。

この類の特徴としては、(2), (3), (4)のように文様が全体的に不鮮明である、赤味がかった褐色である器厚が10mm前後である、内面の調整痕が貝殻様であることなどがあげられる。(1)のように、山形文といえるものもあり、難しいところである。



第15図 第5類土器



第16図 第6類土器

第6類土器(第16図)

口縁部が中心であるが、貼付刻目突帯文土器である。

(1)は、ほとんど直交した口縁部である。口唇部に刻目を有し、外面の口唇直下に一列列点文を配し、その下部に貼付刻目突帯を横走、斜走させている。貼付後の器面調整はしていない。器厚は7mmを測り、外面一面に煤が付着している。全体的な色調は暗褐色である。

(2)は、わずかに外反した口縁部で、口唇外側に鋭い刻目を施し、その下部に刻目突帯を横走させている。刻目は左傾斜のもので、小間隔に連続させている。貼付後に器面と接している部分の調整を丁寧に仕上げている。器厚は7~9mmで、焼成良好、褐色を呈している。

(3)は、直交した口縁部で口唇部に深浅の不規則な刻目を有し、外面に粗い貼付刻目突帯文を横走させている。(1)と同様、貼付後の器面調整はしていない。焼成もやや脆く、暗褐色を呈している。器厚は7~8mmである。

(4)は、やや外反し、山形をなした口縁部である。口唇部には鋭い刻目を刻し、外面には口唇から2·5cm位下部まで3本の貼付刻目突帯を横走させている。刻目の施文具は複数のもので鋭い施文になっている。一番目の刻目は、左傾斜しているが、2·3番目は不規則に刻している。その下は無文帶である。補修孔が左下隅に見られる。焼成良好、暗褐色を呈し、器厚は最大7mmを測る。なお突帯の貼付後調整はしている。

(5)は、口唇部のやや肥厚した口縁部である。風化が著しく、一部不鮮明な点もあるが、口唇外側に太目の刻目を施し、外面には2条の貼付刻目突帯をもち、貼付後の器面調整はしていない。また、内面には横走する沈線を施している。器厚は9mmで、褐色を呈した焼成の若干脆い土器である。

(6)は、直交した口縁部で、口唇に篦状施文具による刻目を施し、深浅は不規則である。外面には、口唇直下に列点文を配し、貼付刻目突帯を2条横走させている。刻み目は幅2~3mmの太目のものである。器厚は、7mmを測り、焼成良好な暗褐色の土器である。

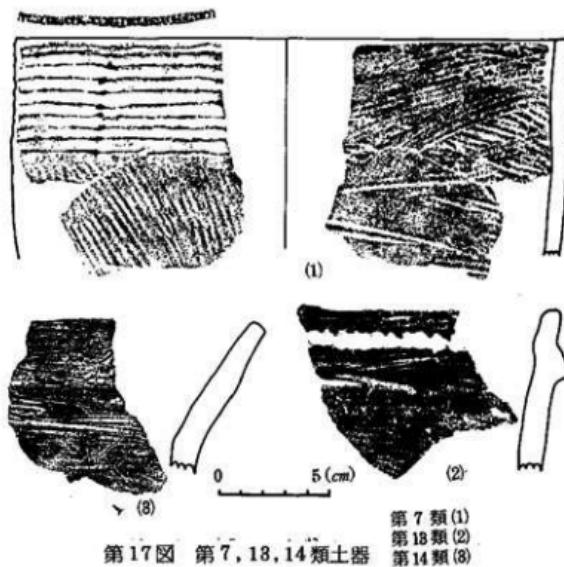
(7)は、焼成良好な黒褐色の直交した口縁部である。口唇部には細かい刻目を浅く刻し、外面に貼付刻目突帯を斜行させているが、刻みは浅く、貼付後の調整も丁寧である。器厚は最大8mmである。

(8)は、焼成良好な暗褐色の直交した口縁部である。口唇部には、顕著な刻目は認められず、外面には、口唇部から幅7mmの貼付刻目突帯を斜行させている。地文として縱走した浅い条痕がみられる。器厚は7mm、煤が付着している。

(9)は、口唇の平らな直交口縁部である。前述のものとは違い、口唇に刻目ではなく、外面の突帯も縦に貼付けている。器厚は8mmの焼成良好な暗褐色土器である。

(10)は、頸部又は胸部付近に位置するものと思われ、一条の刻目突帯文である。貼付後の器面調整は丁寧である。器厚は8mm程度である。内面には貝殻条痕と思われる調整痕がみられる。

以上の10点を施文上の特徴により細分類すると、貼付後の調整のないもの(1),(3),(5),(6)、調整をしているもの(2),(4)、刻目の顕著でないもの(7),(8),(9)、即ちの8種に分けることができる。



第17図 第7, 18, 14類土器

第7類〔第17図(1)〕

ミミズバレ文土器で、いわゆる轟式土器である。直径24.5cmの深鉢形土器口縁部である。

口唇には細かい刻目があり、外面には口唇下4.7cmまで9条のミミズバレ文様（細陰起線文）を施しているもので、粘土細貼り付けによるものである。その下は斜めに条痕を施している。内面には、斜・横方向に器面調整の条痕がみられる。器厚7mmの薄手で焼成良好な黒褐色を呈した土器である。

第8類土器（第18図）

クサビ形貼付文を主とする。いわゆる吉田式土器である。

(1)は、わずかに外反する口縁部である。風化が著しく、施文様が不鮮明な所も多いが、外面には口唇直下に二列の貝殻刺突文を配し、その下に縦にクサビ形貼付文を施している。貼付文の下には、貝殻引文と思われる文様が認められるが、風化のため断言できない。褐色を呈した脆い土器で器厚8mmを測る。

(2)もわずかに外反する口縁部である。口唇部には刻目を有し、外面直下には貝殻刺突文が横位にみられる。その下には、丁寧に貼り付けられたクサビ形貼付文が縦に、その貼付文間には貝殻刺突文が縦に施文されている。色調は黒褐色の脆い土器である。器厚は口縁部は薄く5mm、その下は厚く7mmを測る。

(6)は、角筒と思われる胴部破片である。器外面には、全体的に貝殻押凹文がみられる。内面は風化が著しい。器厚7mm程度のうすい褐色を呈した脆い土器である。

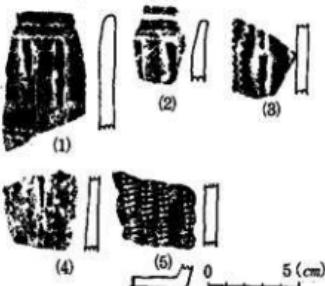
第9類土器(第19図(1),(2))

口唇部が肥厚し若干内湾する条痕文土器である。

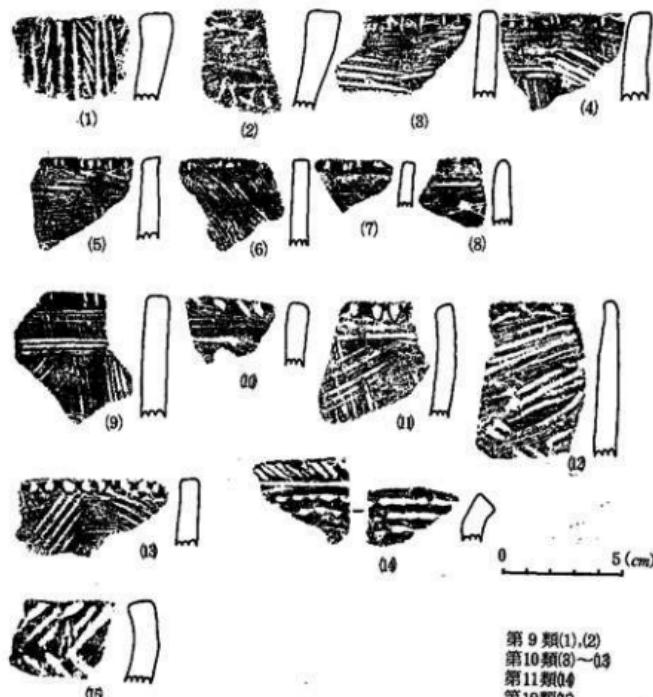
(1)は、口唇が平らで肥厚し、内湾気味の口縁部である。外面に1~1.5mm程度の条痕を縱走または斜走させている。口唇部の厚さは1.8mmである。焼成良好、明褐色を呈している。

(2)は、(1)と同じ器形の口縁部である。風化のため脆くなってしまっており、文様ははっきりしないが、不規則な条痕文のようである。口唇部の厚さは1.8mmであ

り、明褐色を呈している。



第18図 第8類土器



第19図 第9~12類土器

第9類(1),(2)
第10類(3)~(13)
第11類(14)
第12類(15)

第10類土器〔第19図(8)~(13)〕

口唇外面に刻目をもつ条痕文土器群である。

(8)は、口唇部は平らで、外面には範状施文具によるとみられる簡単な刻みを持つ口縁部である。整形も均一でなく、歪みがみられる。また貝殻条痕文が内・外面ともにみられる。器厚は8mmを測り、焼成良好な赤褐色土器である。

(9)は、口唇平らな口縁部である。口唇外面に不規則な刻みをもち、内外面ともに縦横に条痕文を施している。器厚10mmの焼成良好な黄褐色土器である。(8)と同一土器である。

(10)は、口唇平らであるが、器面調整をしていない部分もあり、端整でない。外面に不規則な刻みを持つ、内外面ともに器面調整の条痕文をもつ。器厚最大8mm、焼成の良い褐色土器である。

(11)は、口唇の丸みをもった口縁部で、外面に左傾斜の刻目を持っている。器面調整の条痕文がみられ下端には補修孔がある。器厚は8mm、焼成良好、褐色を呈した土器である。

(12)は、口唇が平らで、内湾した口縁部である。外面には太目の刻目を持ち、その下には縦横に条痕がみられる。器厚7mmの焼成良好な褐色土器である。

この類は、(8)~(11)までは、口唇外面の刻目が範状の施文具を使用したと思われ、細い。(12)~(13)までは、棒状施文具によると見られる太い刻目である。

第11類土器〔第19図(14)〕

1点のみであるが、棒状施文具による刺突押引文土器である。

外反した口縁部で、平らな口唇部には、同施文具による条痕文を斜めに施し、内・外面ともに左から右への刺突押引文がみられる。器厚8mm、焼成の良い褐色土器である。

第12類土器〔第19図(15)〕

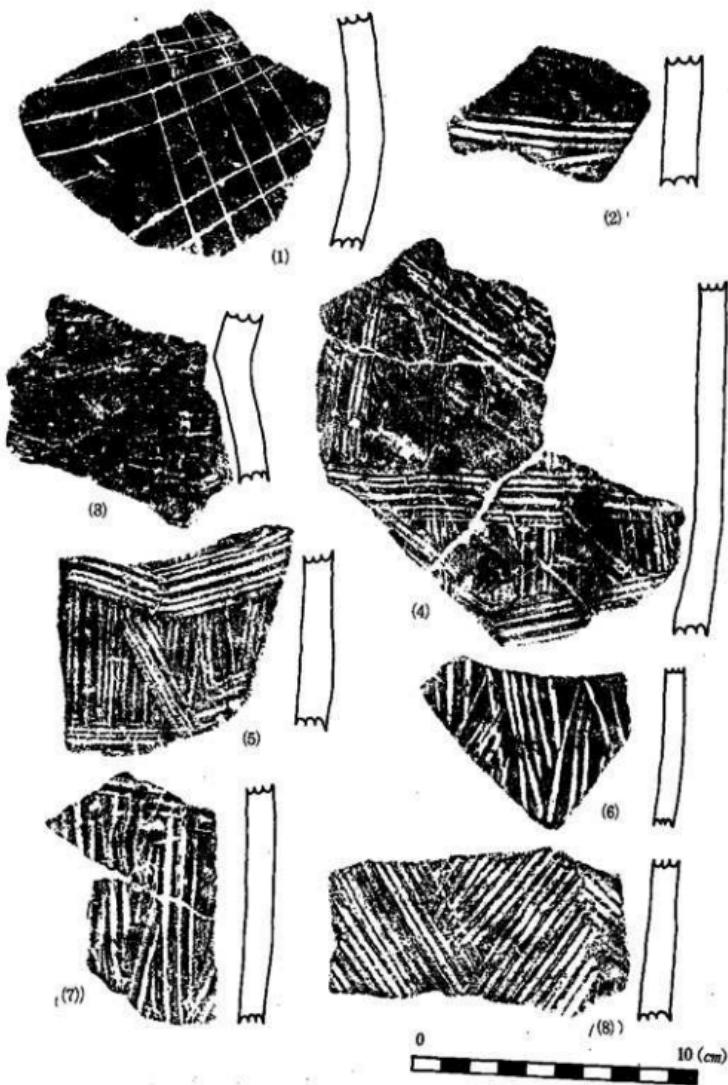
この類も1点出土であるが、口唇に丸味を持ち、外面には綾杉状の貝殻押圧文が見られる内湾した口縁部である。器厚10mmの焼成良好な褐色土器である。

第13類土器〔第17図(2)〕

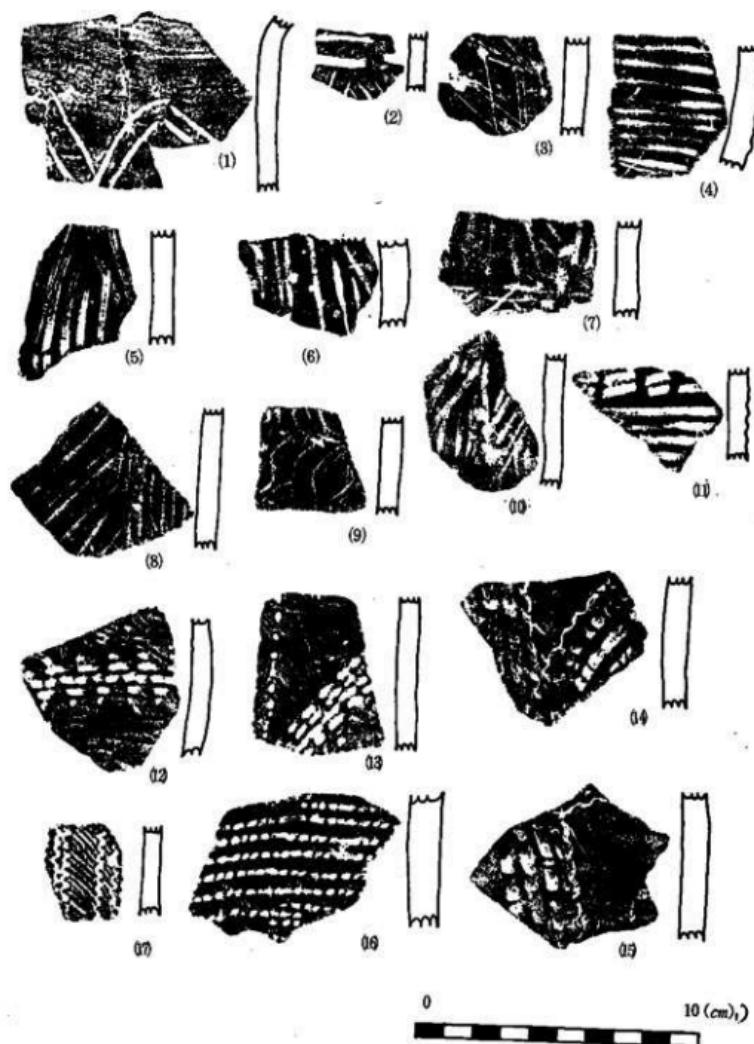
いわゆる市来式土器である。器形的には深鉢形であろう。口唇下1cmの所に太目の刺突文を一列配している。その下は太い突出した隆起がみられる。器厚は下部で11mmで焼成良好な褐色土器である。

第14類土器〔第17図(3)〕

無文土器としておく。器面調整のための条痕は横方向に全面に見られる。器形的には口縁部外反の深鉢形土器であろう。器厚は屈折部下で12mmを測る。焼成良好な褐色土器である。



第20図 繩文土器



第21図 繩文土器

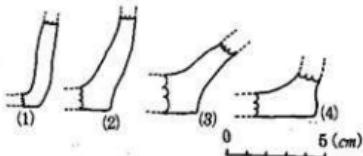
その他

脚部 [第20図(1)~(8), 第21図(1)~(6)]

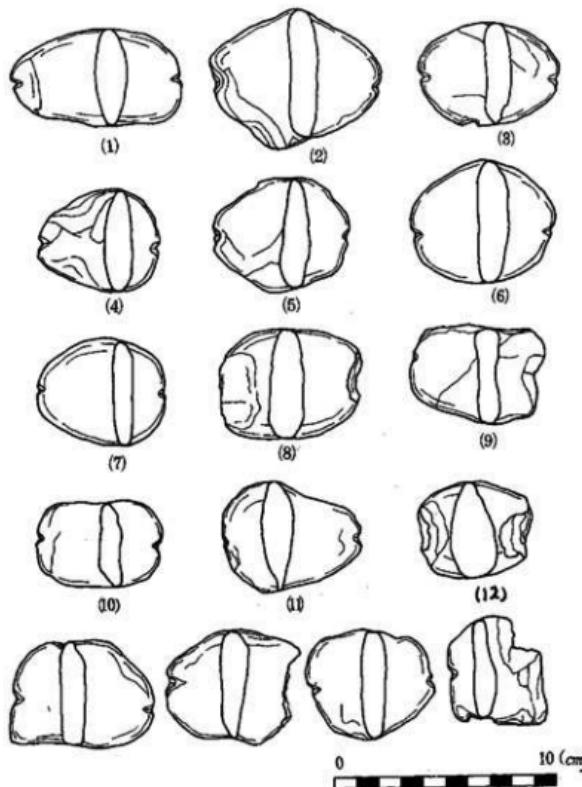
文様的には条痕文, 沈線, 貝殻文等であるが、既述してきた各類の一部を形成するものであろう。

底部 [第22図(1)~(4)]

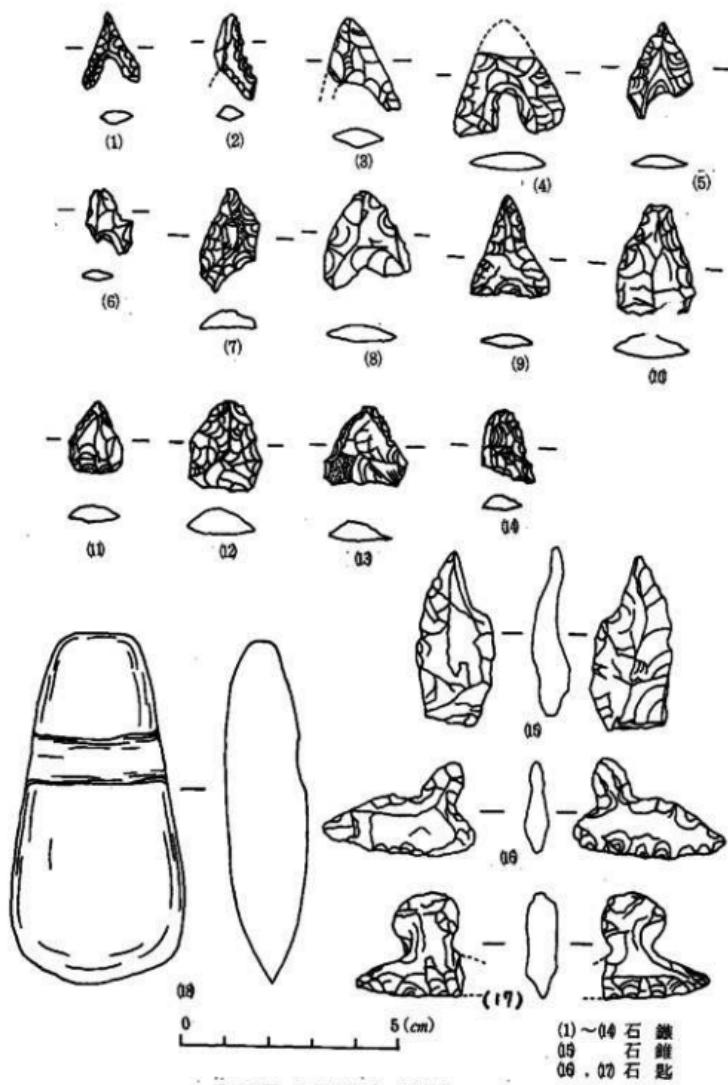
4点とも平底で、焼成良好な褐色土器である。(2)の外面には縱に箒による器面調整痕がみられ、(3)には貝殻条痕がみられる。



第22図 繩文土器底部



第23図 石器実測図 (石錐)



第24図 石器実測図

IV. まとめにかえて

本遺跡出土の縄文土器はほとんど前期に比定できるものであった。

押型文土器について注目すべきものは、第図(1)のような端整な小形波粒文を全面に施したもの、木城町日子山遺跡において出土したものと同じ太形山形文⁽⁷⁾、これらは本県の押型文編年作業に重要なものとなろう。

また、塞ノ神式についてもA-a式、A-b式、B式の出土を見て相互の関連に示唆を与え、吉田式、轟式についても、数少ない前期資料に新たな一括資料を加えたことでも今回の調査の意義は大きいものがあった。残念ながら、相互の関係については層位的に把握できなかったが、バラエティーに富んだ遺物の出土があったことは重ねて喜ぶべきことである。

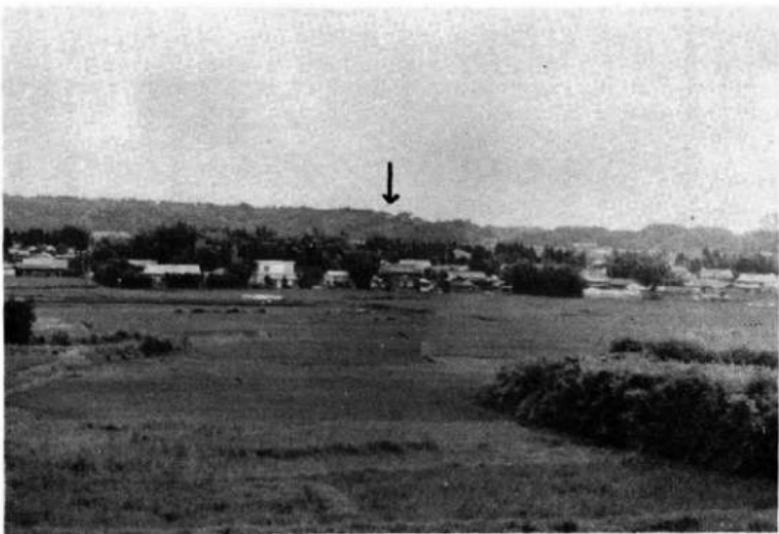
その他、時期的には新しい土師器、土鍤、鉄器(劍)硯などの出土を見たことから、若宮田遺跡にその後も生活の営みがあり、地現的地形的に利用度の高い遺跡であったことがうかがわれるとともに、今後、周辺台地上についての関心を高めていくことが必要と考えられる。

注1. 岩永哲夫「木城町日子山遺跡発掘録」宮崎考古第5号、昭54. 10.

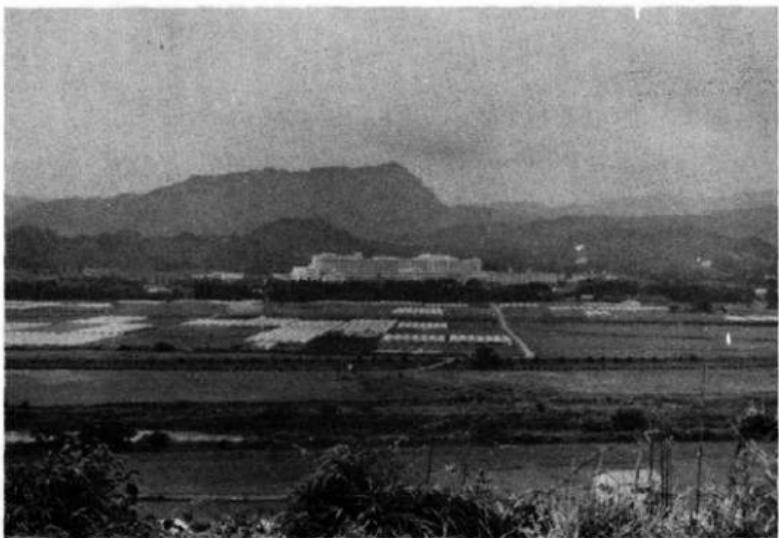
注2. 河口貞徳「塞ノ神式土器」鹿児島考古第6号、昭47. 12.



遺跡付近航空写真(○印)



(1) 遺跡遠景



(2) 宮崎医科大学を望む



(1) 青島を望む



(2) 発掘風景



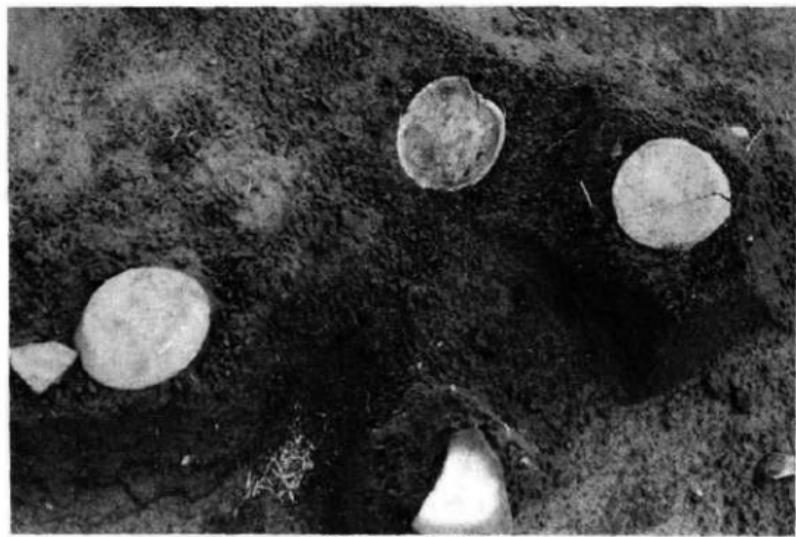
(1) 発掘風景



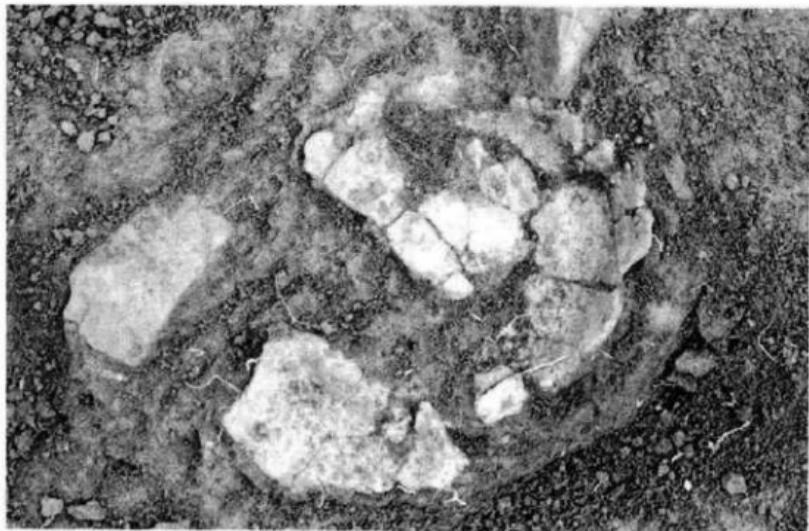
(2) 集石状況



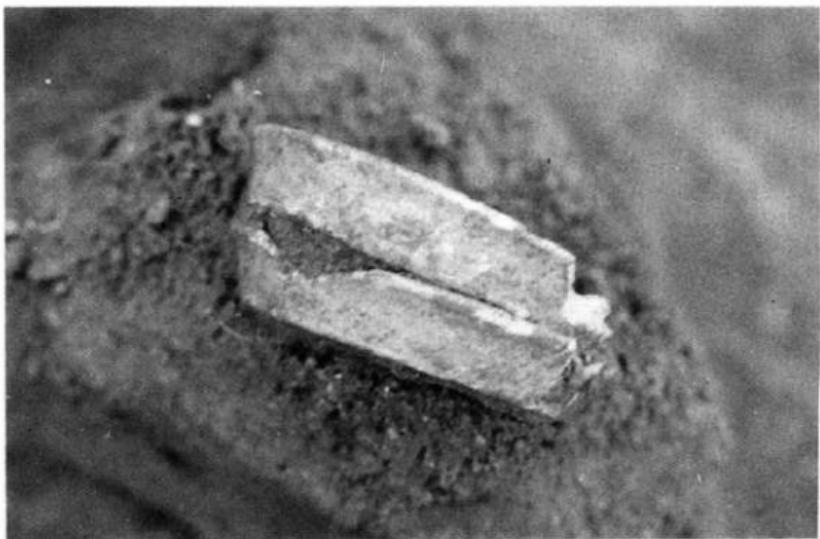
绳文土器出土状况



土師器出土状况



土師器出土状况



(1) 土師器出土状況(二枚重ねている)



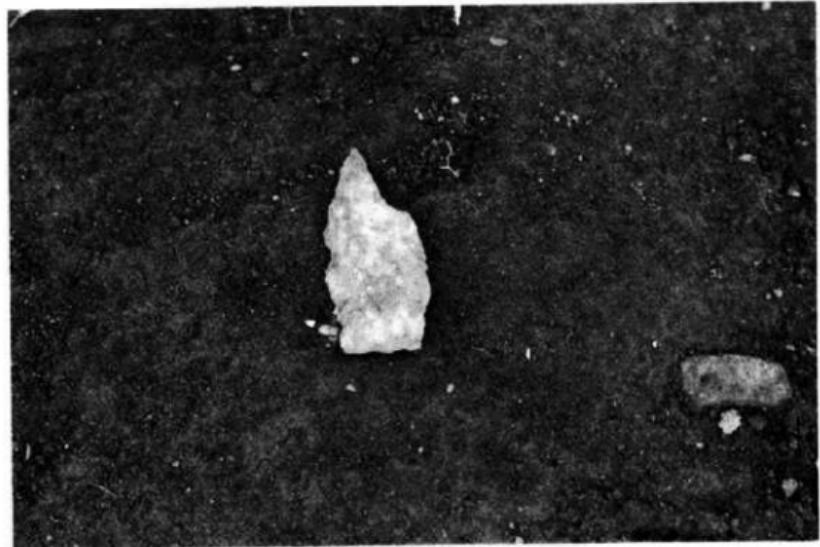
(2) 土錐出土状況



(1) 剑出土状况



(2) 碗出土状况



石器出土状况



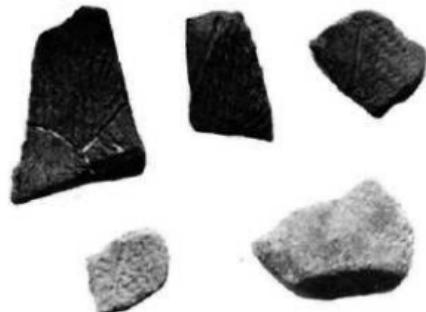
石器出土状况



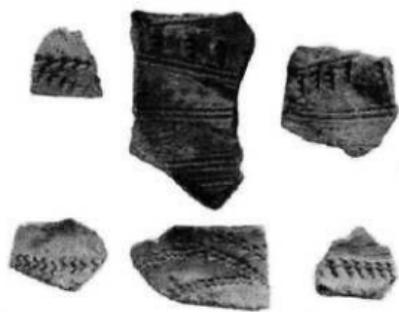
第 1 類 土 器



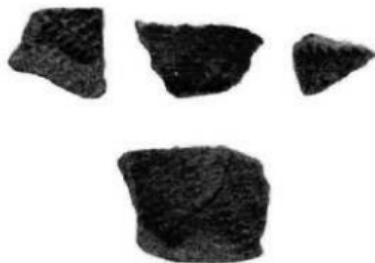
第 2 類 土 器



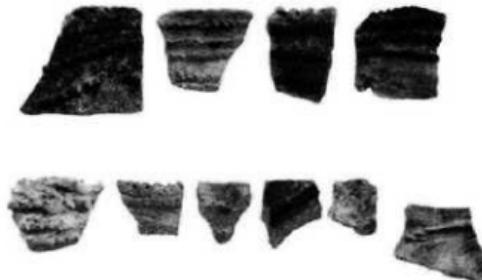
第 3 類 土 器



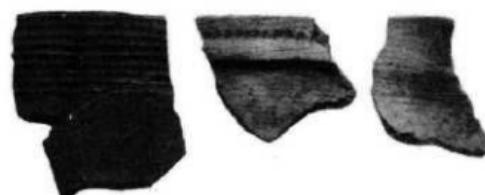
第 4 類 土 器



第 5 類 土 器



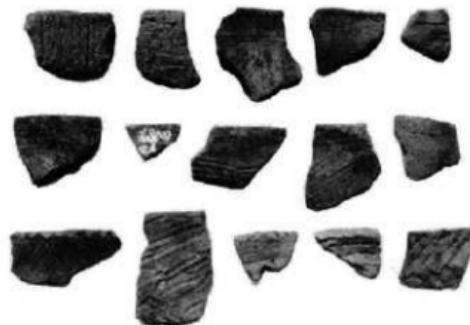
第 6 類 土 器



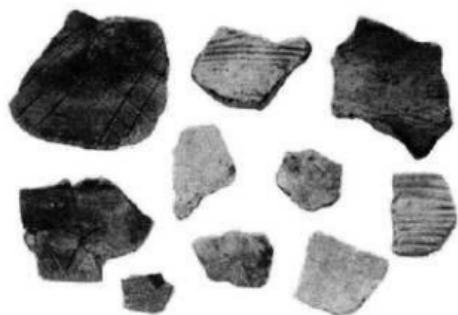
第 7 13 14 類
土器



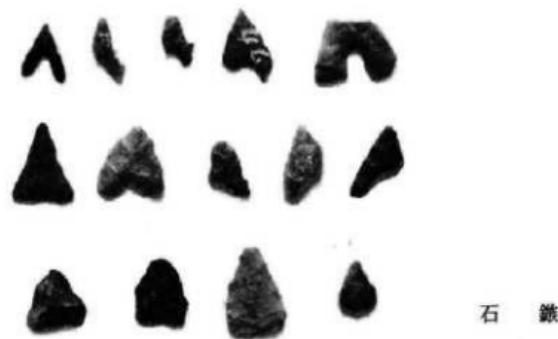
第 8 類 土 器

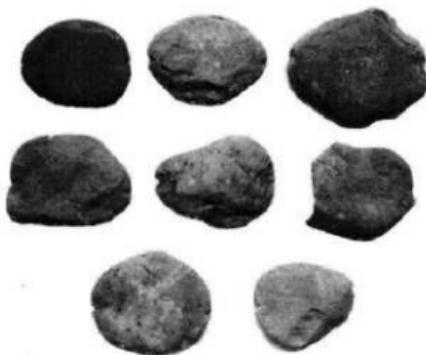


第 9 ~ 12 類
土器



その他縄文土器

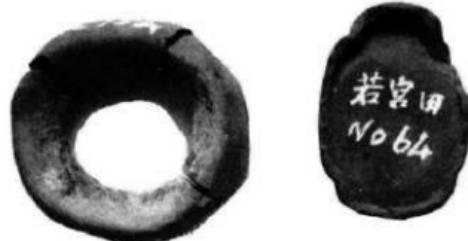




石 錘



石 錘



石 輪(?) 研



土師器



土師器
(糸切底)



土鍾

